

るくるハウス」と名付けたお出かけサロンといった地域福祉活動であったり、「よもくれ団子」と名付けた商品開発であったり、双海地区の特徴である夕日という資源があるにもかかわらず、夕日が沈む頃には、お店が閉まっています、ビジネスチャンスを見失っているのではないかと提案から、夕日を活用する「夜カフェ」を開店したりしました。

また、移住者を増やすために、移住者が地域に入り込みやすい環境づくりの取組みとして、地区内の住民に向けた移住者の受入れに関するアンケート調査や移住者用の住宅として空き家活用の啓発などを行っています。地区外に向けて移住者募集の広報をしたり、移住者と地域の住民との顔の見える関係づくりのために、交流会を開いたりするなど、持続的な活動を展開しています。

そこにあるのではないものねだりではなく、目の前にある地域資源の大切さに気がついた人が、仲間を集めて自分たちでできるで、まず動いてみる。そこで得られた共感がさらに多くの担い手を集め、自発的に継続していくというスタイルをかたくなに守ってきていることが特徴です。ただ、一度始めたからやり続けたいいけないということではなく、疲れたから、忙しくなったから少し休もう、新しい応援団ができたからやろうなどと、できる範囲の取組みとなっているのが特徴です。住民主体のまちづくりはこういうゆるさがあるのもいいものだと思わせていただく事例です。



まちづくり学校双海人でのワークショップの様子

### (3) これから（第三世代）のまちづくり （まとめに変えて）

これからの時代は、誰一人取り残さないという基本理念を持つSDGs（持続可能な開発目標）に向けた取組みや、LGBTQに象徴される一人一人の生き方に寄り添いながら多様性を尊重する社会になってきています。多様かつ複雑な地域課題の解決に向けて、それぞれの思いを実現するためのマルチステークホルダーによる協働がたくさん起きていく社会になっていくのです。これからのまちづくりは、課題解決型の取組みから価値創造型の取組みになるのではないかと考えています。課題解決型のまちづくりは、わかりやすく、関係者が集いやすい。ただ解決に至るまでのプロセスは多様で、正解がない。課題によっては、ゴールにたどり着く前に疲れ果ててしまうことが往々にしてあるケースをよく見ます。私などもかかわったまちづくりの中で、成果が見えやすい課題から取組み、小さな成功を重ねて大きな成功に導くといった取組みなどをアドバイスしたこともありましたが、ただ、課題解決にとらわれると、窮屈な取組みになり、楽しさが失われます。そこで、もがき苦しんでいくことになります。

また、課題解決のゴールをどこに設定していくのか、よくエンドレスの活動にしないということも言ってきました。例えば、町並み保存事業にとってのゴールは、伝統的建造物群保存地区に指定されることではなく、保存地区を活用して豊かで暮らしやすいまちをつくっていくことだと。だからこそ、私権の制限を伴いながらも次の世代に自分たちの宝として残していこうとする心意気生まれるのです。制度を糧にしてまちをつくっていく取組みになります。一方、制度にとらわれない取組みもあります。先日、生垣をコンセプトした団地の方々と話す機会がありました。この団地は、建設当時（おおむね40年前）のガイドラインでは、屋根は和瓦、外壁は聚落色、外構は四つ目垣と設定されています。その団地では今あらためて、人口減少、少子化、高齢化の影響を受けて